

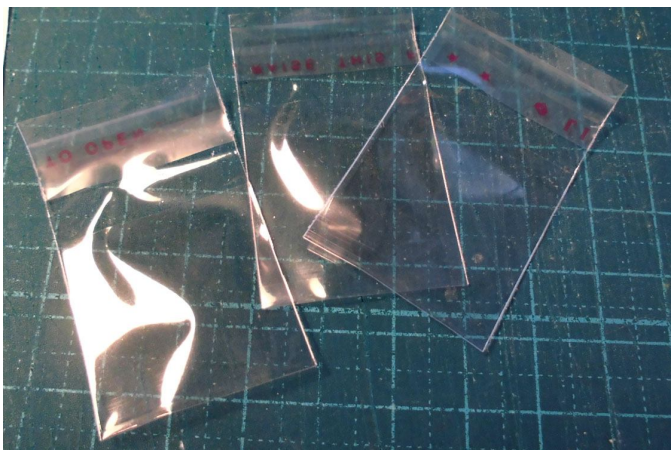
「愛すべき鉱物(6)」～黒雲母～

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

切断してうすく剥がした「黒雲母の標本」は、子どもたちにとって、一種の「宝」である。手のひらに載せて、大切に自分の班に持ち帰る姿でそれがわかる。薄いのでそのままノートに貼らせても良いのだが、「標本としての価値」は、できるだけ単体として保管することにある。長瀬の売店で、すばらしい化石の標本を、ボンドで無造作にボール紙に貼って売っているのを見て、がっかりしたことがある。「百円!!」ショップで売っている、一番小さいチャック付きのポリ袋でもまだ大きい。

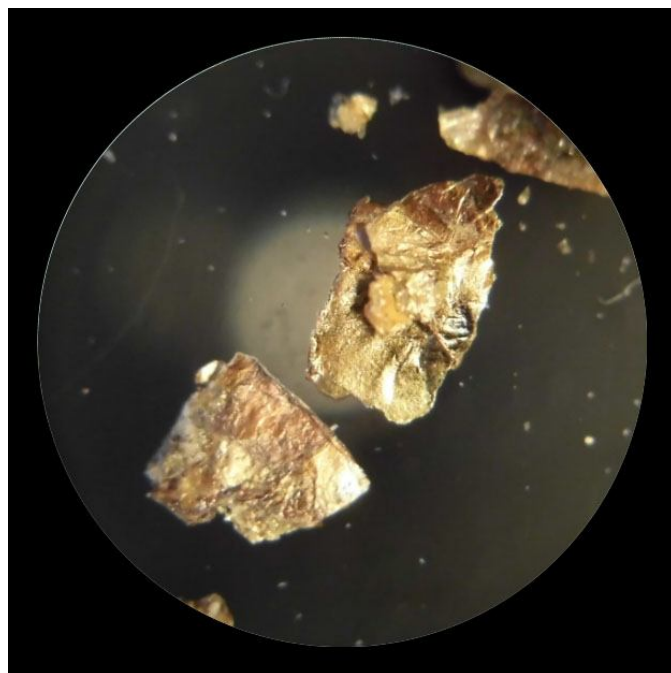


私は、ポリ袋メーカーにこのような OPP 袋を特注した。短辺 3cm 程度で、蓋にはテープがついている。2000 枚注文して、1 枚 1 円程度の価格だった。

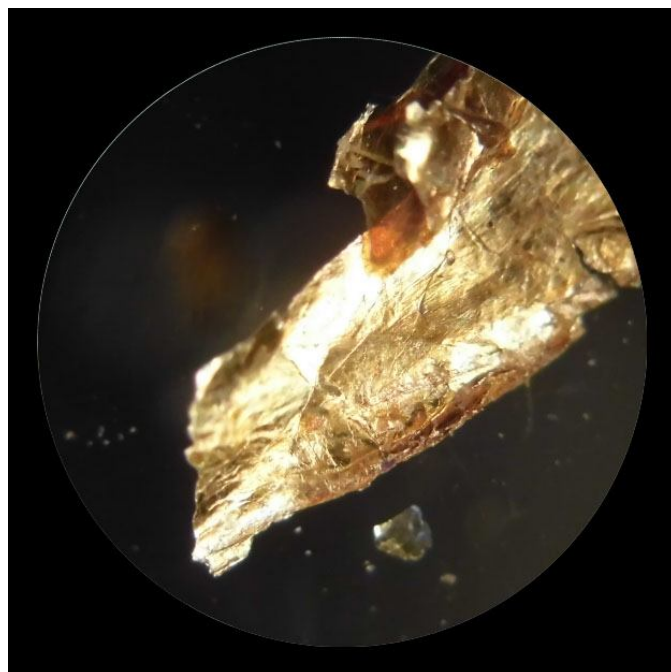


蓋を閉じると、3×3cm の大きさになる。中身がよく見えるし、これなら安全にノートに貼ることも可能だ。左が黒雲母小片、右がかんらん石の小結晶だ。

黒雲母を切断して小片にし、薄く剥がす実験をすると、必ず小さな破片が発生する。破片といっても角は尖っているものもあり、手のひらで集めるのは少し危険だ。小さな机上用ほうきで集めたほうが良い。



集めた破片は、顕微鏡で観察させると良い。倍率は 40 倍か 100 倍、黒雲母は不透明なので、透過光(顕微鏡の光源装置)は意味がなく、反射光(天井の蛍光灯)のほうがきれいに見える。顕微鏡で反射光で見ると、より一層金色に見えて実に美しい。



やはりこの標本は、かなりマグネシウム・リッチの「金雲母」に近いものだったようだ。どの破片にピントを合わせても、まるで金箔のように輝いて見える。ごく薄く剥がれた破片は、光を透過して、橙色に見えるものもあった。これらは、是非観察させたい。